

① 23年ぶり 雪なし 高田市の小正月

〔週刊文化 昭和33年1月16日〕

高田市では十五、六日に全く雪のない小正月を迎えたが、これは二十三年振りのことだった。高田市除雪対策本部の調べでは一月中旬の積雪の最高は三・五メートルの昭和二十年、一・八メートルの十八年、続いて一一・五メートルが大正十一年、昭和三、九、十一、十二、十三、十四、十五、十九、二十三、三十二年の十三カ年、一メートルが大正十二年、昭和五、八、二十六、二十九年の五カ年で、全く雪のなかったのは昭和七年と十年の二カ年だけとなっている。この外は一〇センチから六〇センチ程度だったが、昭和七年と十年には二月中旬から三月中旬まで一〇―三〇センチの雪があっただけで、昭和二十四年には一月下旬に七〇―一八〇センチ積もったものが下旬までに消え、その後は積もらなかった。しかし二月に入ってから大雪になった昭和二年の例もあるので、市民は雪なし小正月を喜ぶより心配な表情だ。

② 素晴らしい雪景色 清水市の交歓中学生喜ぶ

〔週刊文化 昭和33年1月30日〕

直江津市と静岡県清水市を結ぶ国道十八号線の着工を記念して、昭和二十九年から行われた高田、清水両市の中学生交歓会は夏は雪国の高田の中学生が清水市を訪れ、冬は雪を見たことのない清水市の中学生が高田を訪れていたが、今年は第九回を迎え、二十四日に清水市の一、二、三中と三保中の生徒七十人が新雪三十センチの高田市を訪れた。一行は午前七時高田駅で盛大な出迎えを受けた後、市中行進して大町中学校、高田市教育委員会主催の歓迎式に臨み、午後は大町、城南、附属、新道、津有などの各受け入れ中学校の交歓会に出席して、二十七日まで三日間生徒の家庭で雪国の生活を過ごした。始めて雪を見たという清水二中の□□□□君は「雪景色の壮大さは全く素晴らしい、表日本と裏日本ではこんなに気候が違うのかと驚きました。こんな雪の中で生活する人達のこととは想像もできません。三日間良く雪国の生活を観察していきたい。」と語っていた。一行は二十五日は妙高温泉でスキーを楽しむ、二十六日は金谷山スキー場でジャンプ大会を見学して、二十七日午前九時発の列車で清水市に向かった。

③ 一人平均七・四回 昨年の映画入場回数

〔週刊文化 昭和33年1月30日〕

高田税務署管内三市一郡の常設映画館十六館の昨年の入場者数は百九十一万五千二百八十二人で、一人平均七・四回入場したことになり、前年より十八万一千六百九十四人が多く映

画を見たことになっている。またこの入場料は一億三千七百六十八万九千四百円で、うち二千四百四十四万一千円が税金だった。月別入場者の最高は一月の二十万二千六百三十九人で、ついで八月の十九万九千五百人、最低は二月の十二万六千七百人となっている。

④ 市民スキーは中止 雪不足のスキー祭

〔週刊文化 昭和33年2月13日〕

日本スキー発祥の地の高田市では「スキーまつり」を年中行事の一つとして盛大に行うことになり今年からポスター四百枚を印刷して上越各地へ配付したが、肝心な雪がないため十六日行われる予定の市民スキー大会は中止となった。十五日の前夜祭は午後五時半金谷山レルヒ記念塔前から約五百人の青年団や市民がタイマツを持って下り、南本町小学校で婦人、子供隊と合流市中行進することになっている。また十七日は夜七時から城南中学校で「スキー映画と講演の夕べ」を行うことになっている。

⑤ タイマツ行進〔週刊文化 昭和33年2月20日〕

日本スキー発祥の地の伝統と誇りを示すため計画されたスキー祭りも生憎の暖冬異常でさっぱり氣勢が上らなかつた。前夜祭のタイマツ行進だけは約七百人の市民が参加して行われ、主催に明年からの行事に自信を持たせたのは大きな収穫だった。原始時代から火にあらがれを持つ人間の習性を利用し、スキー発祥の昔を偲ばせたのは近来にない企画だと好評。

(2)

⑥ 素晴らしい性能 ピーター除雪車動く

〔週刊文化 昭和33年2月20日〕

高田市が昨年予算四百二十万円で頸城鉄道自動車KKに作製を依頼して完成したピーター除雪自動車は雪が少く、性能試験を行うことが出来なかつたが、十五日午後一時半から新雪に恵まれ高田公園忠霊廟前広場で除雪試験を行った。エンジン前の二つの筒から雪の滝の白糸の水芸の様に左右自由に放出され素晴らしい威力に参観の関係者は少雪を嘆く程だった。なおこの性能試験の実況はNHKテレビにより全国に紹介された。

⑦ 城北小の転用 文部省に申請中〔週刊文化 昭和33年2月27日〕

高田市議会二月定例会全員協議会は二十七日午後二時からひらき、合併、教育問題について話し合った。教育問題について横尾議員の質問に池野教育長は「大町、春日両中学を統合し城北小学校を中学校に転用できるよう文部省に陳情し申請書を提出した。この転用が実現

したのち全市的な学校統合を研究する。」と答えた。

⑧ 学校給食は34% 要望される山間部の実施

〔週刊文化 昭和33年2月27日〕

上越四市三郡の小学校二五七校のうち給食を実施しているのは三四・六%の八九校しかなく食生活改善のため学校給食の最も必要な山間部の実施校が一五%という実態が教育庁上越出張所の調べで明らかになった。郡市別の実施状況は次の通り(単位は%)

△高田市七一・四 △直江津市五五 △中頸城郡四三・一 △新井市四〇・九

△糸魚川市二七・六 △西頸城郡一三・九 △東頸城郡一〇

で山間部の多い西頸、東頸の実施校が少ないのは児童の栄養改善の面からも好ましくない傾向なので父兄の協力と理解によって早急に実施されることが望まれている。

⑨ 上越初の自動局 直江津電報電話局完成

〔週刊文化 昭和33年5月29日〕

工費一億円で直江津市御幸町に建設をいそいでいた直江津電報電話局の新局舎が完成、十八日午前零時から上越でははじめての自動式電話としてスタートした。同局舎は鉄筋コンクリート三階建延べ五百三十八坪、一階が電信電話の事務室、電池室、二階が機械、電話搬送室、三階が事務、交換、マイクロウエーブの遠隔操縦室となっている。自動電話への切替え式は井田信越電気局長、三国直江津局長ら関係者百二十人があつまっておこなわれた。十七日午後十一時五十五分ベルを合図に切替え工事の技術者約六十人、電話交換手二十五人がそれぞれの部署につき、同五十九分井田局長が合図のベルを押すと同時に一斉に切替え作業に入り、十八日午前零時五分から自動電話の接続が開始された。これにより同局の交換手はいままで六十人から四十七人に減ったが、同局では人員整理をおこなわず、局内の配置転換で操作することになっている。なお市内の電話はいままで番号に二千番を加えた番号となる。また旧電話機は十九日から約一週間くらいの間に撤去される。

⑩ もう水は大丈夫 水路落盤 復旧終る

〔週刊文化 昭和33年6月12日〕

去る四月十四日発生した中頸城郡板倉村【※昭和33年8月1日から町制施行】板倉発電所用水路の落盤事故で同用水路からかんがい用水をひいている上江、中江両用水関係の板倉、高土、清里、三和、直江津有田地区の関係水田約五千町歩は水不足と干ばつに悩まされ、辛じて去る三日夜から四日にかけて降った雨で田植をするといった騒ぎであったが、東北電

力ではこの落盤箇所への復旧作業に突貫工事を進めた結果、十三日約二カ月ぶりであろうやく完成、きょう十四日午前九時から通水式を行うことになった。これで水不足で悩んでいた農民はやっとホッとした面持である。

⑪

めだつ自動車の増加 高田市役所前は28年の3倍

〔週刊文化 昭和33年6月26日〕

高田土木出張所は去る十日から三日間管内二十一カ所でおこなった「全国交通情勢調査」をこのほどまとめた。これによると全体的には自動車の増加が目立っているが、もつとも交通量の激しかった高田市役所前は五年前（二十八年）の調査の約三倍、また終戦後の二十一年にくらべ二十八倍という激増ぶりをみせていた。調査したのは朝七時から夜七時までの十二時間となっているが、管内ではもつとも歩行者が多かったところは高田駅前通り（調査場所Ⅱいづも屋百貨店横）で一日一万三千二百八十六人（数字は三日間の平均、以下同じ）で五年前にくらべ三割近いふえ方をみせた。ラッシュアワーの朝八時から九時までと午後四時から五時までの一時間にそれぞれ二千人前後の人が通行している。ところで市役所前の国道十八号線は歩行者のばあい二十八年の一・五割増で一万二千九十三人をかぞえたが、とくにいちじるしいのは自転車と肩を並べるほどのびたことで、二十一年の六倍、二十八年の二倍近い一万一千五百六十二台であった。これは三・八秒に一台が通過していることになる。また同地点で原動機付自転車は九百七十六台、オートバイは七百九十七台と記録された。また自動車ではバスの四百五台を含めた乗用車が八百五台を占め、トラックは一千二百二十九台であった。オートバイと特殊車、自衛隊の車を含めると全部で二千八百十四台になり、十五秒おきに車が走っている計算だ。

⑫

ミコシ渡御や花火大会 直江津のぎおんまつり行事

〔週刊文化 昭和33年7月3日〕

十四日夜から三日間、上越最大の夏まつりとしてぎやかに行われる直江津市伝統のぎおんまつりはもうすぐだ。ことしは長らく懸案の直江津港分流工事着工の年とあって港まつりと一本化し全市をあげて景気をつけることになり、このため柳沢市長を委員長に行事委員会をつくり構想をねり、三日午後からの委員会でも全プランが本決まりした。荒川でのミコシの川渡御が行われる十四日夜は仕掛や大玉打上げ三百五十組の花火大会で夜空を色どる一方、川面には青年団が奉仕する一千個のとうろう流し、中央商店会のタイムツ流しがあるほか、港内に停泊する漁船団も協賛し万灯を飾った約十隻のミコシ迎船に参加し満艦飾で出動する。十五、十六両日はミコシの町内渡御に合わせて各町内の山車コンクールのほか、専門店会主人連で仮装の清水港二十八人衆次郎長道中で人気をおおる計画。この宣伝にポ

スターやパンフレットを大量につくって県内をはじめ長野県方面にも配布し観光客誘致に馬力をかけ直江津港への認識を深める方針で、街は早くもボンボリや提灯、広告灯など、まつり準備に活気づいている。

⑬ 祇園祭〔週刊文化 昭和33年7月10日〕

高田市恒例の祇園祭は、七日から幕を開けたが、表祇園の七日は小雨に見舞われ、各町内の屋台の数も少なかったが、青年会の有志は雨にも負けず祇園ばやしも景気よく目抜き通りを練り歩いた。

⑭ 花火や民謡踊り 高田まつり六日から開幕

〔週刊文化 昭和33年8月7日〕

商店街の夏枯れを吹き飛ばそうと広告行列から七夕飾りに衣がえした「高田まつり」は六日から十日までにぎやかに繰りひろげた。行事は花火や民謡踊りの街頭流しなどで商店連盟は期間中の「中元売出し」で八千万円の売上げを狙っている。今年から街をいどつた七夕飾りは約五百本でこの費用はざつと三百万円、六日の広告行列は十五台が参加、高田駅前から旧市内、稲田と練り歩いた。また七日には民謡団体協議会の会員百五十人が市内を踊り流し、市商工課では「高田の四季」として十六ミに天然色で撮影した。八日夜の花火大会はスターマイン仕掛、打揚げなど百五十余発が夜八時から打揚げられ、九日には婦人や青年の民謡流しが約三百人によって行われる。

⑮ 川澄市長も招待 清水・高田の中学生交歓十回迎う

〔週刊文化 昭和33年8月7日〕

清水市のお友だちと交歓する高田市の中学生一行百五人は、三日夜九時五十分発上野行列車で高田駅を出発した。両市の交歓会はことしで十回目（五年目）にあたり、これを記念して清水市で記念式がおこなわれるが、川澄市長、池野教育長ら多数が特別招待された。一行は七十人の生徒と二十六人の付添い教師と招待者合わせていままでになく大勢で、同夜八時三十分高田駅で壮行式がおこなわれた。一行は東京経由で四日午後一時二十分清水市につき、歓迎式場の公会堂まで市中行進する。五、六日は家庭交歓会、学校交歓会、工場・観光地などを見学し、七日午後零時八分清水市を出発、中央線経由で帰高の予定。

⑯ 堤防十四カ所決壊 台風二十一号 高田地方の被害

〔週刊文化 昭和33年9月18日〕

台風二十一号の影響で高田地方に降った雨は十七日正午現在一四二ミリとなり各地に被害が出た。二時現在高田土木出張所でまとめた被害状況 左の通り

△関川 堤防決壊、新井市美守百十竝、高田市藤巻二十竝、木田三十竝、中頸板倉町二カ所 六十竝

△矢代川 堤防決壊、高田市西田中五十五竝

△別所川 堤防決壊、中頸清里村二カ所八十五竝、中頸板倉町四カ所百五十五竝

△櫛池川 堤防決壊、中頸清里村二十竝、高士村三十竝、護岸決壊、清里村二十竝

△桑取川 護岸決壊、直江津市大淵八十竝、同増沢百竝

△橋の流失 桑取川、西横山橋、下小池橋、向山橋

△工事中の橋の流失 五

△橋脚流失 五

△家屋の流失 中頸妙高村土路 農協職員□□□□さん(四二)平屋建住宅十五坪、損害三十万円

△増水危険のため休校したもの 直江津市桑取小・中学校

△早退したもの 新井市斐太北小、高田市黒田小

△登校不能で欠席児童を出したところ 直江津市高住小、谷浜中

⑰ 快晴の謙信公祭〔週刊文化 昭和33年9月18日〕

第三十三回謙信公まつりが十三日高田市春日山神社で行われ、午前十時から礼殿で式典を挙行、小川宮司のノリト、川澄市長・大島議長の玉グシ奉てん、庭清の舞、斎藤前県教育委員の謙信公をしのぶ記念講演などがあつたのち、同十一時半から境内で剣、柔、弓道、相撲の四競技上越大会を行い、高校、中学生をまじえた二百余人の選手が熱戦を繰り広げた。謙信公まつりは雨か風のジンクスを破る珍しい快晴に恵まれ、人出も午後からグンとふえ、三十余軒の露店が並んだ境内は身動きできないほど、さらに夜六時から約二時間春日山頂から境内にかけ、二十のカガリ火がたかれ、参詣者は約三万人にのぼった。

⑱ 十月からメートル法実施 高田・直江津の販売業者

〔週刊文化 昭和33年9月18日〕

高田市役所をはじめ市内の各物品販売業者は、十月一日からそろってメートル法を実施する。これは県計量検定協会主催により九日高田商工会議所で、同検定協会上越支部や市、商工会議所、市内の各業種組合代表ら三十人が集まってひらかれた打合会できまった。新潟、長岡でもすでに十月一日実施をきめており、県計量検定協会では、県下の歩調をあわせるた

め各地で話し合いを進めてきたもので、この日集まった業種組合は酒類販売、菓子、食肉、衣料、菓業、金物、茶業、ミソ、米穀、デパートのほかスキー製造など十一業種で、各組合とも十月一日実施に賛成した。すでにスキーメーカーはさる三月からメートル法を採用しており、米穀、デパートなども実施、また菓子、金物、茶業などは今月一日からメートル法に切りかえている。なお高田市や商工会議所では「十月一日」実施を市民に広く知らせるため、各戸に回覧板を回すほか市内や商店の店頭にポスターをはって宣伝に努める。直江津市商工課はメートル法施行に備えて九日、商工会議所、業者代表などと打合せを行った結果、二十日までに実施推進委員会を結成、県の施行日である十月一日からいつせいに全商品の表示を切替えることになった。実施推進委員会には各業種ごとに代表一、二人の参加を求め、現行表示との換算表の作成、その他啓発宣伝をおこなう。

①9

12月からテレビ放送 弥彦山の中継塔建設進む

〔週刊文化 昭和33年10月16日〕

待望のテレビが新潟県でも十一月二十日から試験電波が発射され、いよく各家庭で見られることになった。新潟県はNHKとラジオ新潟TVの二局だが、NHKの方が一足さきに十一月二十日に、ラジオ新潟は十二月上旬の予定でそれぞれ試験電波を出すもの。そして本放送はNHKが十二月一日から、ラジオ新潟が十二月廿五日となっている。そこで県下各都市ではラジオ業者やテレビ専門業者が販売合戦に猛烈なしのぎをけずって行われている。

NHK新潟TVは来月20日試験電波 NHK新潟放送局では、テレビ開局工事を急いでいるが、この十六日弥彦山放送所に放送機を据えつけ、十二月一日、本放送の運びとなった。全国で十八番目の開局である。いま弥彦山頂に建設中のテレビアンテナは高さ四十三メートルで、東京都芝のマンモステレビ塔の約二倍、出力も五キロワット。もつとも当分は東京からの中継専門で、新潟では天気図、パターン、簡単な写真を入れるだけ。ローカル味豊かなテレビ放送は、まだ先のことだそうだ。しかし、プロ野球や相撲が居ながらに観戦出来るのは魅力で、現在百二十八台しか登録されていない受像器も放送の始まる十二月には三千台、来年三月までに一万台にふえるだろうとNHKではみているが、豊作景気がフィになったので、なか見通しをつけ難いという。なお、新潟放送局では、十二月四日長岡市で開局記念前夜祭を行い、NHK交響楽団を招くほか、同五、六、七日の三日間、新潟市で多彩な記念行事を計画している。

信越放送は十一月上旬

信越放送テレビ(SRC)は十一月上旬から放送を開始する。発

信所は標高二、〇三四米の松本市美ヶ原に架設、出力は映像一kw、音声五〇〇w、アンテナは十二段スーパータンススタイルで高さ五〇米の鉄塔である。東京より長野演奏所まで電々公社のマイクロでうけ、演奏所と送信所は自社のマイクロで結ぶ。放送区域は長野県全

域と新潟、山梨の一部。

十五日開局の富山テレビ またNHK富山テレビジョン放送局は十月十五日開局。本放送を開始した。(設置場所〓富山県婦負郡呉服町小竹)チャンネル第三、そして開局を記念して十五日富山市公会堂で式典、ラジオ、テレビ同時放送により十七日午後七時三十分より四十五分間にわたってNHK人気番組、花の星座、歌のスタイルブックなどが放送されるが、すでに糸魚川市を中心に西頸城地方はテレビが見られている。

ラジオ新潟放送は十二月二十五日の予定 一方ラジオ新潟TVは新潟本社のスタジオ建設が完成し、目下弥彦山中継塔建設に昼夜兼行工事を急いでいるので、十二月上旬には試験電波の発射を予定している。(十二月廿五日本放送開始)同テレビの出力は映像5kw、音声二・5kwである。またテレビは当分は中継放送を行い、漸次ローカル放送に主力を注ぐことになる。なお中継経路は東京(ラジオ東京がネット・ワーク)電々公社のマイクロ・ウエーブを使い、長野を経由して新潟電々公社に入り、同社から有線で放送局に送られ、同局から弥彦山頂のテレビ塔に(六三八米)映像を送り、電波にのせる仕組である。サービスエリアは県内の大部分と福島、山形、富山、長野の一部など世帯数四十三万戸に達するわけである。

②〇 直江津港 五年計画で改修に着手

〔週刊文化 昭和33年10月23日〕

直江津港改修計画は、予算や用地買収などで難航を続けていたが、補償問題も漸くメドがつき、今年から国の港湾計画にのり、総工費二十四億五千万円で着工することとなり、十一月二日建設省港湾局長、北村知事を迎えて起工式が行われる。直江津港は関川の河口にあたるので、流された土砂が航路や船だまりを埋めてしまい、冬の間まったく入港出来ないばかりか、石炭、塩などを積んでくる二、三千ト級の貨物船がみんな港外に停泊し、沖荷役をしなければならぬ状態である。そこでこんどの工事で関川河口を分流し、港内の土砂を海に流し、一万ト級の船を直接岸につけるようにし、年間の貨物扱いを六十万トにふやそうというもの。まず今年は事業費五千五百万円のうち、工事費二千五百万円で防波堤と導流堤の一部をそれぞれのばすほか、航路を掘る。また設計がえした新しい工事計画によると、いまの航路五万坪を埋め、導流堤をとりはらったあとへ新しい航路をつくる。さらに航路を埋めた場所を守るため、いまの防波堤からさらに四百米の堤を築くもの。完成後の五年後には裏日本でも有数の港となり、本県産業界に大きな発展を期待されている。